

# 病の文学を読む

—正岡子規、ありのままに見る写生の心—

(1)

Reading Literatures Written by Patients

—Shiki Masaoka, the spirit of Shasei (Sketch) seeing things as they are—

(1)

産業医科大学 医学部 哲学概論

前田 義郎

University of Occupational and Environmental Health, Japan, philosophy MAEDA Yoshiro

## Abstract:

Physicians need understand minds of patients in order to practice humane medical care. A method to understand patients internally is to read notes written by patients. In this paper I want to read essays of Shiki Masaoka and to understand his mind, attitude and worldview. There are three methods to interpret texts in Dilthey's understanding theory. Namely, "induction", "relive" and "life-category". I apply them in this paper. In the first, I try to summarize the life of Shiki (induction). Shiki was a great reformer of Japanese poems, Haiku and Waka (31-syllable Japanese poem). He had suffered from Pott's disease for a long time and died in 34 years old. Then, I try to revive his sentiments, sufferings and attitudes toward his life, exhibited in his literatures. In this process, I find several key words (life-categories) moving Shiki's life inwardly. One is 'desire'. Shiki showed strong desire for good foods. Falling in critical sickness means abandoning desires in patients. Other ones are 'vanity' and 'true needs'. Shiki came to discriminate between vain attitudes and true needs in human life. He changed his attitudes towards his life.

**Keywords:** 正岡子規 (Shiki Masaoka)、追体験 (relive)、生のカテゴリー (life-category)、欲 (desire)、虚栄心 (vanity)

## 1. 「病の文学」を読む意義と方法

最初に「病の文学」を読む意義を考えておきたい。人間は誰でもいずれは年をとり、病気に苛まれる存在である。若くて健康な人にとっても、そうした人間の在り方に無関心でいることはできない。いずれは誰でも行く道だからである。同時に医学もまたそ

うした病者や高齢者を取り扱う仕事である。医学が単に身体の修理に留まらず、人間的な側面を有するためには、患者の心を理解する必要があるだろう。しかし健康な人には、病者や高齢者の思いに対して自己自身を遮断し、無視しようとする否定しがたい傾向がある。病者の心は、世の多くの人々にとっては秘められた日陰の心なのである。では我々ほどの

ようにすれば病者の心、思い、世界観を理解できるだろうか。そこで考えられるのが、病者が書いた文学や手記などを読むことを通して、病者の思いや心情や物の見方を知るということである。これが「病の文学」を読む意義である。

ではどのように病の文学を読めば、病者の心、心境、世界観を理解することができるのだろうか。私は以前その問題について詳しく論じたことがあるので<sup>1)</sup>、ここではその要点について述べたい。

まず憶えておかなければならないことは、他者理解は自然科学におけるように対象を外部から観察するような態度では可能にはならないということである。むしろ他者の理解は、他者を自分と同等の「あなた」として見るような態度、言い換えれば、「二人称的な関係」においてはじめて成り立つということである。その上で私たちは、病者のような極めて個人的な経験をしている人を理解するための方法として、ディルタイの3つの方法を心がけて読みたいと思う<sup>2)</sup>。

その一つは帰納 (Induktion) の方法である。つまり著者が置かれている状況や過去の経緯をできるだけよく調べ、それらを全体として総括することである。そのことによって読者は、著者を動かしている「生の連関」(Lebenszusammenhang)へと立ち帰ることができる。ディルタイは述べている。こうした生の連関がさまざまな表現を通して自らを明らかにするとき、著者が語った言葉は自伝 (Selbstbiographie) の形をとることになる。そこで読者もまず著者の人生についてできるだけよく知る必要がある。その上で著者が語る個々の言葉を、著者の生が自らを表した表現として捉えるのである。

第二は、追体験 (Nacherleben) の方法である。著者はテキストを通じて自らの思いを表現している。そこで著者を理解したいと考える読者は、まず帰納を通して知り得た著者の立場に自分を置こう (Hineinversetzen) と努める必要がある。その上で読者は、著者がテキストを書いた場所から、その表現されたテキストを通して、著者の思いを内的に体験し、感

得するのである。これが「追体験」である。その上で読者は自らの追体験を回顧するような仕方で、著者の心を自得的に会得するのである。この手続きが「解釈」(Auslegen)である。要点は、著者の生を、読者自身の生と重ね合わせて理解するということである。こうした方法によって、文字としてテキストに記されていない作者の思いや心情も理解することが可能になると思われる。

しかしこの方法は、その場その場の著者の心情に焦点を当てるのみであるから、著者のもっと深い心境や世界観を理解するには、テキストの別の読み方が必要になるだろう。それが第三の方法「生のカテゴリー」(Lebenskategorie)である。すなわち、著者自身の生を内面から動かしている主要な契機を発見することである。言い換えれば、テキストを追体験を通して読みつつ、その中に働いている「重要なキーワード」を発見することである。そしてそうしたキーワードに留意し、それに即しながらテキストを読み進むことを通して、著者の心境のより深い次元が次第に明らかになっていこうと考えられる。生のカテゴリーは、テキストを理解するための「補助線」のような働きをすることになる。ディルタイは以上のすべての過程を「理解(了解)」(Verstehen)と呼ぶのである。

なお本稿が行うのは、ディルタイで言えば、解釈学的な個性的、記述的心理学の研究であるから、「生のカテゴリー」と言っても、最初から多くの人々に妥当する一般性を目指しているわけではない。ただ一人の人の思いをより深く掘り下げてゆけば、多くの人に通底する側面が現れてくることは十分にあるだろうと思われる。人間が病気や死において直面する事態はそれほど異なるわけではないからである。たしかに人によって思いや考えは異なるだろう。ただ多くの円を描いてゆけば、次第にそれらの円が重なり合う共通の領域が見えてくるように、こうした研究を繰り返すならば、おのずから多くの人にも妥当する一般的な面が露わになってくるだろうと思われる。私が究極の目的とするのは、病気や死に

おける人間の深い理解を扱う「医療人間学」の構築である。本稿の考察もそうした目標達成の一里塚になるだろうと思われる。

そこで本稿ではこうした病の文学を読むという課題と方法を、病に苦しみ、病の内に生を終えた正岡子規の文学を読むことをとおして明らかにしてみたいと思う。人間は誰でも病気や高齢で亡くなるが、病者の思いや考えを詳しく記して残した人はそれほど多くはない。その点、正岡子規は亡くなる直前まで自分の思いを記した文章を残している。そこで本稿では、子規が病者として、何を考え、何を感じ、どんなことに苦しみ、人生や世界に対してどんな見方をしたか、そしてどのようにして人生の最期を迎えたかを理解したいと考えるのである。その際に子規文学の核心にある「写生」という概念と態度に注意を払うことになるだろう。

## 2. 正岡子規の生涯

### 略歴

相手を理解するためには、まずその人がどんな人生を、どんな経緯で歩んできたか、どんな仕事を残したか等を調べる必要がある。こうした作業が著者をより正しく理解するための土台となる〔帰納〕。幸い正岡子規についてはいくつかの詳しい伝記が公刊されている<sup>3)</sup>。そこでそれらに基づいて子規の人生の経緯を略述してみたい。

正岡子規は、慶応3年(1867年)10月14日(太陽暦、以下同じ)<sup>4)</sup>、伊予国温泉郡藤原新町(愛媛県松山市花園町)に、松山藩士正岡常尚と八重の長男として生まれた。名は常規(つねのり)、子供の頃は升(のぼる)と称した。父の常尚は下級武士出身で、真面目であるが気むずかしい性格の人で酒を好んだと言われている。父は子規が4歳(満年齢、以下同じ)の時に亡くなっている。母の八重は、藩の儒者大原観山の長女である。観山は優れた学者で、年少の子規を愛し、漢文などの手ほどきを与えた。

父の没後、子規の一家を物質面、精神面で支えたのはこの母方の家系で、母の弟の大原恒徳が後見人となって経済的に支えた。また別の弟に加藤拓川(恒忠)がいるが、彼は海外に留学し、外交官、政治家として活躍した人物で、若き子規に大きな刺激を与えた。他に2歳下の妹の律がいる。

子規は少年時から仲間との関係を重視した人である。ただ彼は下らない人間とは付き合わない、自分を高めてくれる優れた特質を持つ人だけを友にしたと語っている。子規は少年時から自作の漢詩や文書を書いた回覧雑誌を編集し、仲間内で読んだり、さまざまな勉強会を開いたりして楽しんだ。こうした彼のやり方は大人になっても続いていくのである。

子規が生まれ成長した時代は、明治維新前後の激動の時代で、子規も叔父加藤拓川の助けを得て、立身出世の野心を懐いて東京にやってきた。子規は東京大学に入学し、最初哲学を志すことになった<sup>5)</sup>。彼が学んだり、影響を受けた哲学は、N・ハルトマンの審美学、スペンサーの文体論などで、当時の東大教授、新カント派の哲学者ブッセから講義でカント哲学を学んだ。しかしカントの哲学が十分に理解できず、哲学を諦めることになった<sup>6)</sup>。彼はそこから結核を患うようになり、短い人生を日本文学、特に俳句と和歌の革新に捧げようとの思いを固めることになった。そうして一度は進んだ東京大学文学部国文科も中退することになる。

その後子規は社主である陸羯南の助けを得て、新聞『日本』の社員となる。『日本』は、欧米化されていく日本社会の中で日本古来の伝統を再評価することを目的に設立されたが、子規も同じ意見であったので、彼は『日本』紙上で、俳句、短歌などの日本文化の革新運動を行うことになった。こうして彼は経済的にある程度自立できるようになり、母と妹を東京に呼び寄せることになった。

子規が行おうとしたことは、西欧哲学の知見、特に審美学(美学)の見地から、日本の伝統的な美と趣味を批判することにあつたといつてよいだろう<sup>7)</sup>。日本語で「批判」と言えば、あら探しをして相手を

けなすことであるが、西欧哲学で言う「批判」の原義は「分ける」(krinō)ということであり、良いものを良いと言い、悪いものを悪いと言うことである。子規はどんな権威のある人でも良くないと思えば良くないと言い、どんな無名の人でも良いと思えば良いと言ったのである<sup>8)</sup>。その意味で、子規がやろうとしていた日本文学の革新運動は、まさに日本的な美の批判であり、趣味の批判であったと言ってよい。そうした作業は、日本的な美の新たな源泉の発見をもたらすものでもあった。

子規の病気についても述べておきたい。彼は結核を患い、21歳で始めて咯血した。子規という号も、血を吐き続けても鳴くのをやめないホトトギスを表す言葉として選ばれたものである。彼の病気は次第に進行して、後に脊椎カリエスに苦しむことになる。この病気は、結核菌が身体の各部に広がり、身体を腐敗、壊死させていく病気であるが、特に脊椎などの神経系が触まれることになった。元来子規は野球が好きで、歩いて旅をすることも好きという至って活動的な人物であるが、この病気のために自分の活動範囲が狭められていく。日清戦争時に新聞『日本』の記者として短期間大陸に渉るが、この旅行が彼の健康に決定的な悪影響を及ぼすことになった。その後立って歩くこともできなくなり、晩年の数年間は自宅の病床において『日本』の記事執筆や、俳句雑誌『ホトトギス』などでの評論活動などの仕事を行うことになった。子規が亡くなったのは、明治35年(1902年)9月19日である。享年34歳であった。彼は結婚せず生涯独身であった。

### 著作

言うまでもなく、正岡子規は俳句と和歌などの日本文学の革新運動を行った人物であり、著作としても俳句論、和歌論、俳句、和歌、随筆など多くを残している。講談社から全22巻(別巻3巻)の『子規全集』が出版されている。しかし我々としては、「病の文学」を読むという目的のために、彼の最晩年の著作に焦点を当てたいと思う。そしてそれらの著作

との関連において他の著作も参照することにした。

子規には、晩年の3大随筆と呼ばれるものがある。第一は『墨汁一滴』<sup>9)</sup>で、明治34年(1901年)1月16日から7月2日まで、新聞『日本』に連載されたものである。これは子規が亡くなる一年半前ころに当たる。二つ目は公開を目的としない病床の日記『仰臥漫録』<sup>10)</sup>である。これは3期に分かれているが、分量から言って主要なものは第1期のもので、明治34年9月2日から10月29日まで書かれた。これは彼が亡くなるおよそ一年前の日記に当たる。三番目は『病床六尺』<sup>11)</sup>である。これは新聞『日本』に連載された随筆で、明治35年5月5日から亡くなる二日前の9月17日まで継続された。整理すると以下のようなになる。

墨汁一滴	明治34年1月16日～7月2日
仰臥漫録	明治34年9月2日～10月29日(第1期のみ)
病床六尺	明治35年5月5日～9月17日(9月19日死去)

このように考えると、子規は亡くなる約一年半の間にこれらの3つの随筆を書いたことになる。しかもこれらはほぼ重なることなく、それぞれの時期に対応しており、これらを読むと子規自身の心境の変化を読みとることができる。本稿では、これらの随筆に焦点を当てながら、正岡子規の心境を理解したいと考えるのである。そこで以下の叙述に際しては、文章が書かれた時期を明示し、可能な限り時系列的に読み進めることを通して、病気の深まりとともに子規の心境や考えがどのように推移していったかに注意を払いたいと思う。

### 3. 病態

正岡子規の心境を理解するためには、彼の晩年の病態がどのようなものだったかを知る必要がある。



子規の随筆には自分の病気や苦しみについて述べた文章が時折出てくる。そのような文章を読む際には、解釈者は友人に対してするように、二人称として自らを著者の生の位置に置き、文章を読みつつ自ら感じ取ることによって[追体験]、著者の心境を会得することができるだろう[解釈]。ここで取り上げるのは、亡くなる一年半前ころに書かれた『墨汁一滴』の文章である。

人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確実になるならひなり。我病床における希望は初めより極めて小さく、遠く歩行き得ずともよし、庭の内だに歩行き得ばといひしは四、五年前の事なり。その後一、二年を経て、歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉しからん、と思ひしだに余りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが、一昨年夏よりは、立つ事は望まず坐るばかりは病の神も許されたきものぞ、などかこつほどになりぬ。しかも希望の縮小はなほここに止まらず。坐る事はともあれせめては一時間なりとも苦痛なく安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな。最早我望もこの上は小さくなり得ぬほどの極度にまで達したり。この次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期、釈迦はこれを涅槃といひ耶穌はこれを救ひとやいふらん。(明治34年1月31日)<sup>12)</sup>

子規の病状は悲惨である。本来活動的で野心に溢れた若者であった子規にとって、このように手足が縛られ、身動きが出来なくなることがどれほど残念なことだっただろうか。そうした思いを詠んだ歌がある。

足たゝば不尽 [富士] の高嶺のいたゝきをいかつち [雷] なして踏み鳴らさましを (明治31年)<sup>13)</sup>

ただ健康でありさえすれば、子規はどれほど多くの業績を残したであろうかとも考えられる。この時

期に自分の病気について詠んだ歌がいくつかある。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ (明治34年5月4日)<sup>14)</sup>

これらの歌も追体験を通して味わうことができるだろう。これらの歌には命が尽きようとするのに対して率直な悲しみが表されている。藤の花房が短いので「たゝみの上にとゞかざりけり」という言葉には、自分の思いと現実とが乖離したもどかしさを感じさせる。いちはつ(一初)の花を見るのは今年かぎりと思いつつも、秋くらいまでは命が保つだろうと、秋の草花の種をまくところに子規の心が表れている。生命が憎いわけではない。できれば生きていたい。しかし生きるに生きられない現実がある。

このころ奇妙な夢を見ている。

昨夜の夢に動物ばかり沢山遊んで居る処に来た。その動物の中にもう死期が近づいたかごろげまはつて煩悶して居る奴がある。すると一匹の親切な兎があつてその煩悶して居る動物の辺に往て自分の手を出した。かの動物は直に兎の手を自分の両手で持つて自分の口にあて嬉しさうにそれを吸ふかと思ふと今までの煩悶はやんで甚だ愉快げに眠るやうに死んでしまふた。またほかの動物が死に狂ひに狂ふて居ると例の兎は前と同じ事をする、その動物もまた愉快さうに眠るやうに死んでしまふ。余は夢がさめて後いつまでもこの兎の事が忘られない。(明治34年4月24日)<sup>15)</sup>

子規にとって救いとは何だったかについては後に考えてみたい。

#### 4. 明治 34 年 9 月 2 日の日記

次に子規の日記『仰臥漫録』から彼の日常生活を見てみたい。彼が亡くなる約 1 年前の明治 34 年 9 月 2 日の日記に次のようなものがある<sup>16)</sup>。

子規の自宅の病室の前は庭になっていて、子規はそこに多くの植物や花などを植えて楽しんでいた。明治 34 年の夏は、夕顔、ふくべ、糸瓜を植えていた。夕顔とふくべは同じもので瓢箪のことである。子規は病間にさまざまな俳句を作っている。

夕顔の実をふくべとは昔かな  
夕顔も糸瓜も同じ柵子同士  
夕顔の柵に糸瓜も下りけり  
鄙の宿夕顔汁を食はされし  
夕顔の太り過ぎたり秋の風  
柵一つ夕顔ふくべへちまなんど  
柵の糸瓜思ふ処へぶら下る  
試みに名をは巾着ふくべかな  
取付て松にも一つふくべかな  
子を育つふくべを育つ如きかも

これらの俳句から子規のどのような感情、心境、態度を知ることができるだろうか。自らを子規の立場に置き、句を読みつつ自ら追体験することによって、著者の心境や態度を会得するのである。

部屋前の柵に取り付いて、いろいろな夕顔、糸瓜がぶら下がっていた。瓢箪や糸瓜と言ってもすべて同じ形、色ではない。丸いのや長細いがある。「夕顔の太り過ぎたり秋の風」、「試みに名をは巾着ふくべかな」の句では、個々の夕顔の相違をよく観察している。あたかも一つ一つのふくべを掌に載せて、愛でて楽しんでいるかのようである。ここには目の前にあるものをよく見ること、ごくつまらない些細なものでも大切にするという態度が見て取れる。

また一心に俳句を作って遊んでいるかのようである。子規にとって句を作ることは病間を埋めるものだっただろうが、そのあいだ病の苦しさを忘れるこ

とができる。俳句を作っている時の子規の平静な心境を感じ取れる。次々と句が口をついて出てくるとは本人にとって快いことだろう。それは自己の精神の健全さの証である。昔のことも思い出される。

「鄙の宿夕顔汁を食はされし」むかし田舎の宿屋で夕顔汁を食べさせられたことが思い出された。「子を育つふくべを育つ如きかも」ふくべの成長を見ると子育てのようすに連想が働いた。これらは心がゆっくりと開いて癒されていくかのようである。現在が過去と結びつき、そして他の人々との関係が取り戻されてゆく。これは現在の激痛だけに囚われていた自己の在り方から、自己の全体性や本来性が回復されることを意味するだろう。

この日の日記には子規が食べた食事の記録が載せられている。

朝 粥四碗、はぜの佃煮、梅干（砂糖つけ）  
昼 粥四碗、鯉のさしみ一人前、南瓜一皿、佃煮  
夕 奈良茶飯四碗、なまり節（煮て少し生にても）  
茄子一皿

この頃食い過ぎて食後いつも吐きかえず  
二時過牛乳一合ココア交て

煎餅菓子パンなど十個ばかり

昼飯後梨二つ

夕飯後梨一つ

服薬はクレオソート昼飯晩飯後各三粒（二号カ  
プセル）

水薬 健胃剤

今日夕方大食のためにや例の左下腹痛くてたま  
らず 暫にして屁出で筋ゆるむ

彼の食事についての印象は何だろうか。率直な印象は、かなり美味しそうな食事をしているなあということだろう。また食事の量が大過ぎはしないかというものだろう。しかし子規はなぜこのようにたくさん食事をするのだろうか。子規自身が答えを述べている。

松山木屋町法界寺の鱧施餓鬼とは路端に鱧汁商  
ふ者出るなりと 母なども幼き時祖父どのにつれ  
られ弁当持て往てその川端にて食はれたりと も  
つとも旧曆二十六日頃の闇の夜の事なりといふ

餓鬼も食へ闇の夜中の鱧汁

午後八時腹の筋痛みてたまらず鎮痛剤を呑む  
薬いまだ利かぬ内筋ややゆるむ

母も妹も我枕元にて裁縫などす 三人にて松山  
の話殊に長町の店家の沿革話いと面白かりき

十時半頃蚊帳を釣り寝につかんとす 呼吸苦し  
く心臓鼓動強く眠られず 煩悶を極む 心気やや  
静まる 頭脳苦しくなる 明方少し眠る

母たちと郷里の寺で行われる鱧（どじょう）施餓鬼の話をした。餓鬼とは、仏教でいくら食べても食べても満足できない餓鬼道に落ちた人々を指す言葉である。施餓鬼は、そうした餓鬼たちに食べ物を与えて供養する行事である。ここにある「餓鬼も食へ闇の夜中の鱧汁」という句は、子規自身の心境を詠んだ優れた句である。暗い夜中にせつせつせつと泥鱧汁を食べ続ける餓鬼たちは、子規自身の姿でもある。夜の暗さは子規の心の中の暗さであり、それは食べても食べても満たされない飢えと渇きである。それは生命への飢えである。子規は自分の決して満たされないさまざまな欲求を食事によって満たそうとしていると言える。

こうした記述から病者の心境を考えるためのキーワード（生のカテゴリー）の一つとして「欲」をあげることができるだろう。病気になり、死に近づくことは、自らの欲を断念することである。子規にも欲があった。本人も大欲だと言っている。それは俳句、短歌などの日本文学の革新を成し遂げることである。しかしそれだけではない。若い頃のいろいろな場所に行って見聞を広めたいという欲求もあったことだろう。子規は外国に行くことを強く望んだ。彼は生涯独身だったから結婚して家庭を持ちたいという欲求もあったことだろう。しかしこのころには生活上のほとんどのことが不可能になっている。も

はや自力で立ち上がることはできない。子規は別の箇所でも、「総ての楽、総ての自由は尽く余の身より奪ひ去られて僅かに残る一つの楽と一つの自由、即ち飲食の楽と執筆の自由なり。」（明治34年3月15日）<sup>17)</sup>という言葉を残している。

子規はよく「うまいものを食う」という言葉を用いる。結核だった子規にとってうまいものを食うことは治療薬であるとの意識もあったであろう。また子規の友人たちはお見舞いにさまざまな食べ物を持ってきてくれる。うまいものを食うことは、子規にとって友人たちの愛情を感じることであり、周囲の者への甘えでもあったと思われる。彼は愛弟子の長塚節がいつも送ってくれる栗の実に対して喜びを表している<sup>18)</sup>。

しかしさらに重要なことは、重病の子規にとって食べることは「生きる意味」でもあったことである。健康な者にはたくさんのなしうることがある。しかしほとんどすべての自由を奪われた子規にとって、食べることは自分に出来る残り少ない意味のある行為である。租借力のあるうちは食物を食べられるが、粗略力がなくなれば飲み込むしかない。「嗜まずに呑み込めば美味を感じざるのみならず、腸胃直に痛みて痙攣を起す。是において衛生上の營養と快心的的の娯楽と一時に奪ひ去られ、衰弱とみに加はり昼夜悶々、忽ち例の問題は起る「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」」（明治34年5月9日）<sup>19)</sup> 食べることができなくなったら、自分は何の故に生きていなければならないのか分からなくなるのである。「生きる意味」も病者を理解するための重要なキーワードの一つであろう。

この時期に描いた絵がいくつかある。子規は病間に絵を描くことを楽しみとしていた。まず「女郎花と鶏頭」と題された絵を見てみる<sup>20)</sup>。それはスケッチ風にサッサッと描いた粗略画のようである。子規の描く線は弱くて力がない。ただそこには子規が高く評価した与謝蕪村の俳画のような一種の味わいも感じられる。次に「朝顔や絵の具にじんて絵を成さず」の句の付された絵を見てみよう<sup>21)</sup>。この絵は、



涙によって潤んだような、しっとりとした情感やセンチメンタルな感情を感じさせる。それは失われようとする自己の生命に対する哀感を表しているかのようである。少しピンぼけの写真のように何か焦点がはっきりと定まっていないうような印象もある。

後に私たちは子規が亡くなる直前に描いた絵を見てみたいと思う。亡くなる一年前のこれらの絵と亡くなる直前の絵を比較して、著者である子規の心情や心境を考えたいと思うのである。著者が描く絵からも、その人の世界の見方や、心境、態度を理解することができると思われる。



57 女郎花と朝顔

### 5. 人生に対する見方の変化

子規の文章を読んでいくと、病気の深まりに応じて、人生に対する考え方の変化が生じたことを知ることができる。そこで金銭と出世という二つの面から見てみよう。少し長いが引用する。

#### 金銭

余書生たりしときは大学を卒業して少くとも五十円の月給を取らんと思へり。その頃は学士とりつきの月給は医学士の外は大方五十円のきまりなりき。その頃の五十円といへば今日の如く物価の高きときの五十円よりは値打多かりしならん。さて余が書生時代の学費はといふに高等中学在学の間は常盤会<sup>22)</sup>の給費毎月七円をもらひ大学在学の間は同給費十円をもらひたり(この頃は下宿料四円位が普通なり)。されど大学へ入学以後は病身なりしたため故郷よりも助けてもらひし故一ヶ月十三円乃至十五円位を費したり。しかるに家族を迎へて三人にて二十円の月給をもらひしときは金の不足するはいふまでもなく、故郷へ手紙やりて助力を乞へば自立せよと伯父に叱られ、さりとして日本新聞社を去りて他の下らぬ奴にお辞誼して多くの金をもらはんの意は毫もなく、余はあるとき雪のふる夜社よりの帰りがけお成道を歩行きながら蝦蟇口に一銭の残りさへなきことを思ふて泣きたい事もありき。余はこの時まだ五十円の夢さめず縦(よ)し学士たらずとも五十円位は訳もなく得らるるものと思へり。されど新聞社にては非常に余を優遇しあるなり。余はかくて金のために一方な



58 朝顔



らず頭を痛めし結果遂に書生のときに空想せし如く金は容易に得らるる者に非ず。五十円はおろか一円二円さへこれを得る事容易ならず。否一銭一厘さへおろそかに思ふべきに非ず。こは余のみに非ず一般の人も裏面に立ち入らば随分困窮に陥り居る者少からぬやうなり。五十円など到底われらの職業にては取れる者ならずといふことを了解せり。金に対する余の考はこの頃より全く一変せり。これより以前には人の金はおれの金といふやうな財産平均主義に似た考を持ちたり。従つて金を軽蔑し居りしがこれより以後金に対して非常に恐ろしきやうな感じを起し、今まではさほどにあらざりしもこの後一、二円の金といへども人に貸せといふに躊躇するに至りたり。

三十円になりて後やうやう一家の生計を立て得るに至れり。今は新聞社の四十円とホトトギスの十円とを合せて一ヶ月五十円の収入あり。昔の妄想は意外にも事実となりて現れたり。以て満足すべきなり。・ ・

破垣に灯見ゆる家の夜寒かな (明治 34 年 9 月 30 日)<sup>23)</sup>

子規当時の大学とは東京大学を指すので、東大卒業生には月給 50 円が支払われるのが普通であると若き子規は信じていた。しかし現実はそのようではなかった。子規自身大学を中退している。その後、経験と病苦を経て、現実的な見方が出来るようになった。実業ではなく文学を生業にしているという自己の「位置づけ」ができるようになった。病気によって自分の無力も味わった。金銭に対する若い頃の幻想がなくなり、自分の境涯に満足するようになった。晩年の子規ほどの大家になって始めて月 50 円の収入を得られるようになった。自分と周りをありのまま見ることが出来るようになった。

「破垣に灯見ゆる家の夜寒かな」の句について、破垣であるからこの家はどちらかといえば貧しい家なのであろう。しかし冷たい風の吹く寒い夜にほっこりと電灯がともっていて、家族が夕食を共にして

いる。そこには暖かさと安らぎがあることだろう。人間は大してお金がなくても、考え方ややり方によっては幸福に暮らしてゆける。

子規が金銭について書いていることは、文学者として低俗であると考えられる人もいるかもしれないが、決してそうではない。彼が自分の人生や生活について正直に自己吟味が出来る人であったことを示している。自分の野心や夢、欲望、若者としての傍若無人さ、そうしたものが現実とぶつかり合いながら挫折し、正され、成熟したものの見方ができるようになったということである。

## 出世

十六、七歳の頃余の希望は太政大臣となるにありき。上京後始めて哲学といふことを聞き哲学ほど高尚なる者は他になしと思ひ哲学者たらんことを思へり。後また文学の末技に非るを知るや生来好めることとて文学に志すに至れり。しかもこの間理論上大臣を軽視するにかかはらず、感情上何となく大臣を無上の栄職の如く考へたり。しかるに昨年以來この感情全くやみ、大臣たるも村長たるも其処に安んじ公のために尽すにおいて一毫の軽重なきを悟りたり。

今日余もし健康ならば何事を為しつつあるべきかは疑問なり。文学を以て目的となすとも飯食ふ道は必ずしもこれと関係なし。もし文学上より米代を蹴ぎ出だすこと能はずとせば今頃は何を為しつつあるべきか。

幼稚園の先生もやつて見たしと思へど財産少しなくては余には出来ず。造林の事なども面白かるべきもその方の学問せざりし故今更山林の技師として雇はるるの資格なし。自ら山を持つて造林せば更に妙なれど買山の錢なきを奈何。(明治 34 年 10 月 19 日)<sup>24)</sup>

子規は政治色の強い新聞社の記者として政治家とも面識があった。陸羯南をとおして近衛篤麿(文麿の父)から贈り物をもらったこともある。伊藤博文

や大隈重信らの政治家批評を行ったこともある<sup>25)</sup>。当時は日清戦争が終わって、日露戦争が始まるかとしていた時代である。世の中全体が他人の迷惑もお構いなく、行け行けどんどん自己拡張しようとしていた時代である。立身出世を求めることは当時の時代では当然のことであっただろう。そういう意味では子規も例外ではなかった。この文章を書く半年ほど前にも子規は日清・日露戦争への肯定の気持ちを示唆する言葉を書いている<sup>26)</sup>。しかし厳しい激痛に耐え、死を現実的なものとして捉え始めた子規にとって、物事は次第に新たな意味合いを持つようになってきた。

このような変化は、欲求とかインタレストがまったくなくなったというわけではあるまい。自分の自然な欲求すら実現できず、激痛にふるえる現実直面して、自分の生命そのものを見つめる地点から、単なる虚栄心に属するものと、真の必要に属するものの区別ができるようになってきたということである。自己の本来性に立ち返ったとき、意味のあるものと意味のないものの区別が明らかになったということであろう。もう少し後の時期になると、次のようなさらにはっきりとした言葉もある。

僕も昔は少し気取って居った方で、今のように意気地なしではなかった。一口にいうとやや悟って居る方だと自惚れて居た。ところが病気がだんだん劇しくなる。ただ身体が衰弱するというだけではないので、だんだんに痛みがつのって来る。背中から左の横腹や腰にかけて、あそこやここで更る更る痛んで来る事は地獄で鬼の責めを受けるように、二六時中少しの間断もない。さなくても骨ばかりの痩せた身体に終始痛みが加わるので、僅かの身動きさえならず、苦しいの苦しくないのと、そんなことをいうだけ野暮な位になって来た。始めは客のある時は客の前を憚かって僅に顔をしかめたり、僅に泣声を出す位な事であったが、後にはそれも我慢が出来なくなって来た。友達の前であろうが、知らぬ人の前であろうが、痛い時には、

泣く、喚く、怒る、謔言をいう、人を怒りつける、大声あげてあんあんと泣く、したい放題のことをして最早遠慮も何もする余地がなくなって来た。サアこうなって見ると、我ながらあきれたもので、・・とにかく三十も越えて男一人前に髭まで生えて居るような奴が、声をあげて止度もなしにあんあんと泣く、その泣面と来たらば醜いとも可笑しいとも言いがたいのである。ここに到って昔の我を顧みて見ると、甚だ意気地のない次第、一方から言えば甚だ色気のない次第、コスメチックこそつけた事はないが、昔は髭をひねって一人えらそうに構えたこともある。のろけをいうほどの色話はないが、緑酒紅燈天晴天下一の色男のような心持になったこともある。しかしそれは何だ。色気と野心、我輩を支配して居った所の色気と野心、それは何であるか。ちょっとすれちがいに通って女に顔を見られた時にさえ満面に紅を潮して一人情に堪なかつたほどのあどけない色気も、一年一年と薄らいで遂に消え去ってしもうた。・・野心、気取り、虚飾、空威張、凡そこれらのものは色気と共に地を払ってしまった。昔自ら悟ったと思うて居たなどは甚だ愚の極であったということがわかった。今まで悟りと思うて居たことが、悟りでなかったということを知っただけがむしろ悟りに近づいた方かもしれん。(明治35年4月20日)<sup>27)</sup>

ここでもいくつかのキーワードが見つかる。それは「虚栄心」と「真の必要」であろう。病気はもちろん人間にとって望ましいものではない。しかし病気を経験することによって、人生に対するより深い認識がもたらされることも真実である。子規は身をもってそのことを私たちに教えてくれている。

## 6. 子規の世界観

正岡子規自身はもともとどのような世界観を持っ

ていたのだろうか。短かったとはいえ彼は元哲学専攻の学生である。世界についての何らかの考えを持っていないはずはないのである。

自分の病気について今一つ他人の多くは誤解して居る事がある。それは死という問題である。死ということ嫌うがため自分が煩悶して居るんだと思うて居る人が多い。しかし今日になっては死を嫌うがために煩悶することは極めて少ないので、むしろ苦痛の甚しいために早く死ねばよいと思う方が多くなって来た。・・宗教家らしい人は自分のために心配してくれている方法のいろいろの方法を教えられる人があるが、いずれも精神安慰法ともいべきもので、一口にいえば死を恐れしめない方法である。(明治35年4月20日)<sup>28)</sup>

僕は小供のうちから宗教嫌い、二十歳前後の頃は、宗教という言葉も聞いても癪に障るほどであった。・・唯物論に傾いていた僕には何か善くもわからぬ癖に、耶蘇教でも仏教でもただ頭から嫌いで仕方がなかった。それが近年に至って文学上の趣味を楽しむようになってから、智識的な事には少しあきが来て、感情に走った結果、宗教上の信仰という事に味が出て来て、耶蘇教でも仏教でも信仰のある所には愉快な感じが起るようになった。しかしそれは文学上の美感が単に感情の上に立って居って決して理窟を入れないという所から、信仰というものも少し方角は違うがやはりそんなのであるまいかと、推し及ぼしただけの話であって、今にまだ耶蘇教とか仏教とかの信者になる事は出来ない。・・まあそういうような理窟であるから従って僕は人間の意志の自由ということも許さない。右へ行くも左りに行くも手を動かさずも足を動かさずも皆な意志の自由である如く思うているけれど、それも意志の自由ではなくて、やはり或る原因から右に行かねばならぬように、または左りに行かねばならぬように、または手足を動かさねばならぬという必然の結果を生じたのであ

る。・・どうしても僕は小供の時分から今に至るまで唯物論の傾向を脱せぬと見える。(明治35年4月20日)<sup>29)</sup>

唯物論という考えを分析してみると、二つの側面があると考えられる。一つは、精神と身体の間を関係を考える際に、精神は身体の物質的基礎に完全に依存しているという見方である。子規の自由意志を否定する考え方にもそうした見方が反映している。すると人間の精神的な働きと言っても、自然界を支配する因果法則によって支配されているということになる。ここから子規は自由意志はないと言って倫理的価値について存立を否定することになる。子規には、自分には善悪のことは分からないという言葉もある。ただし芸術上の美感や美的価値については独自の地位を認めていたようである。

唯物論のもう一つの側面は、実在するものは自分が目で見たり、手で触れることができる物質的なものだけであって、そうしたものを超えた存在を認めないという見方である。彼は死が怖いのではないというとき、死後の世界というようなものは信じていなかったと言ってもよいだろう。唯物論の人にとっては、エピクロスが述べたように、人間は死んでしまえば、怖いと考える意識自身もなくなるから、死は怖くはないという考え方になるようである。では彼は目で見えるものを超えた存在、例えば自分を超えた存在である神や仏を完全に否定したのであろうか。子供のころからの宗教嫌いという言葉から、そのような傾向はあったようであるが、まだ明言は出来ないようである。ただ「二十歳前後の頃は、宗教という言葉も聞いても癪に障るほどであった」という言葉からは、自分自身が理解でき、支配できるものだけを存在として認めたいという子規の意向が読みとれる。これは普通に言う唯物論とはまた論点が異なる考えで、人間中心主義的な見方であると言える。子規には「おもしろきものは相対なり煩惱なり、つまらぬものは絶対なり悟りなり」<sup>30)</sup>という言葉もある。

(未完)



## 注

- 1) 前田義郎 (2011), 前田義郎 (2012)
- 2) Dilthey, W. (1958)
- 3) 松山市教育委員会編 (1979), 久保田正文 (1967)
- 4) 太陰暦では9月17日にあたる。子規の伝記ではこの日付が用いられることが多いが、本稿では日付を太陽暦に統一する。久保田正文 (1967), p.1-2
- 5) 正岡子規 (1888)
- 6) 正岡子規 (1901), p. 147-150
- 7) 正岡子規 (1888), p. 42
- 8) 子規は松尾芭蕉でさえ批判の俎上に乗せ、紀貫之を厳しく批判した。他方で与謝蕪村を評価し、江戸末期の無名の歌人平賀元義を高く称揚した。正岡子規 (1895), 正岡子規 (1898), 正岡子規 (1901), p. 24-38
- 9) 正岡子規 (1901)
- 10) 正岡子規 (1901-1902)
- 11) 正岡子規 (1902b)
- 12) 正岡子規 (1901), p. 13-14
- 13) 正岡子規 (1975), p. 202
- 14) 正岡子規 (1901), p. 110-111
- 15) 正岡子規 (1901), p. 99
- 16) 正岡子規 (1901-1902), p. 7-12
- 17) 正岡子規 (1901), p. 61-62
- 18) 正岡子規 (1901-1902), p. 51
- 19) 正岡子規 (1901), p. 114-115
- 20) 絵に添えられた言葉は、「女郎花真盛 鶏頭尺より四、五寸のもの二十本許 [ばかり]」である。正岡子規 (1901-1902), p. 31, 松山市立子規記念博物館 (1961), p. 60.
- 21) 絵に添えられた句は、「朝貌や絵の具にじんで絵を成さず 朝顔や絵にかくうちに萎れけり 朝顔のしぼまぬ秋となりにけり 薺 [あさがお] の一輪ざしに萎れけり」である。正岡子規 (1901-1902), p. 41, 松山市立子規記念博物館 (1961), p. 66.
- 22) 旧松山藩主が出資した奨学金で、子規が支給を受けていたもの
- 23) 正岡子規 (1901-1902), p. 88
- 24) 正岡子規 (1901-1902), p. 116-117
- 25) 正岡子規 (1896), p. 24-29
- 26) 正岡子規 (1901), p. 7, 58, 61
- 27) 正岡子規 (1902a), p. 541-543
- 28) 正岡子規 (1902a), p. 543-544
- 29) 正岡子規 (1902a), p. 544-545
- 30) 正岡子規 (1896), p. 16

## 参照文献一覧

1. Dilthey, W.(1958), Plan der Fortsetzung zum Aufbau der Geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften, in Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften VII. 1958, B. G. Teubner Verlagsgesellschaft: Göttingen. p. 191-227.
2. 久保田正文 (1967), 『正岡子規』. 人物叢書, 吉川弘文館.
3. 前田義郎 (2011), 「病の文学」を読む意義—他者理解の可能性と生命の連帯性—(1). 『人間と医療』 (九州医学哲学・倫理学会) 1巻, p. 61-70.
4. 前田義郎 (2012), 「病の文学」を読む意義—他者理解の可能性と生命の連帯性—(2). 『人間と医療』 (九

- 
- 州医学哲学・倫理学会) 2巻, p. 34-42.
  5. 正岡子規 (1888), 「哲学の発足」, 『子規全集 第十巻』. 1975, 講談社. p. 39-42 頁.
  6. 正岡子規 (1895), 「癩祭書屋俳話」, 『子規全集 第四巻』. 1975, 講談社. p. 158-220.
  7. 正岡子規 (1896), 『松蘿玉液』. 岩波文庫. 1984, 岩波書店.
  8. 正岡子規 (1898), 『歌よみに与ふる書』. 岩波文庫. 1955, 岩波書店.
  9. 正岡子規 (1901), 『墨汁一滴』. 岩波文庫ワイド版. 2005, 岩波書店.
  10. 正岡子規 (1901-1902), 『仰臥漫録』. 岩波文庫ワイド版. 1991, 岩波書店.
  11. 正岡子規 (1902a), 「病床苦語」, 『子規全集 第十二巻』. 1975, 講談社. p. 224-324.
  12. 正岡子規 (1902b), 『病床六尺』. 岩波文庫ワイド版. 1993, 岩波書店.
  13. 正岡子規 (1975), 「竹乃里歌」, 『子規全集 第六巻』. 1975, 講談社
  14. 松山市教育委員会編 (1979), 『伝記 正岡子規』: 松山市立子規博物館友の会.
  15. 松山市立子規記念博物館 (1961), 『子規の絵』